

幼児が特性について語るとき

—対人関係における評価次元のひろがりとの関連から—

野田 淳子

The purpose of this study is to examine mentalizing processes in young children, especially in their talking about personality trait. Although it has long been considered that young children being not capable of talking and understanding personality trait, recent studies show 3 to 6 year olds do talk and understand personality trait in some contexts. Children in 5 to 6 year olds often talk about “kindness” of their caregiver voluntarily suggests the necessity to examine “whose” and “what kind” of traits are young children interested in. The important role of emotions and relationships in mentalizing processes is discussed.

1. はじめに

幼児期は、人の「心」についての理解が芽生え、急速に発達していく時期である。人の行動を心的側面に関連づけて理解し、説明する“心理化 (mentalising)”能力の発達近年、発達心理学において大きな関心を集めている。幼児期を対象とした研究では、たとえば情動理解に関しては、2歳頃から日常場面で「嬉しい (happy)」「悲しい (sad)」「怖い (afraid)」といった情動語を使いはじめ (Bretherton & Beeghly, 1982; Wellman et al., 1995 ほか)、3歳頃には表情と情動を対応づけることだけでなく、状況に応じた感情の予測もできるようになってくるとされる (Denham, 1986)。また情動の背景に様々な理由があることに気づきはじめ、4歳頃には情動を生じさせる状況についての理解が進むとされている (Barden, Zelko, Duncan & Masters, 1980)。

さらに、「心の理論 (theory of mind)」の研究では、人は様々な行動現象の背後に意図・欲求・情動・信念・知識など種々の「心」という目に見えない働きについての理論を持つようになり、ひとたびこの理論を持つと、それに基づいて行動の予測をするようになると考える。たとえば Wellman & Barch (1994) は、子どもの会話データから心的状態に言及している言葉を拾い出し、「欲求」をあらわす言葉はすでに2歳頃に使われているのに対して、「思う」「考える」など「信念・思考」をあらわす言葉は3歳代で使われるようになることを見だし、人は願望によって動かされているとする「願望心理学」の段階から、願望は信念を介しても抱くこともできると考える「信念—願望心理学」の段階へと「心の理論」が変化すると考えた。さらに4歳前後になると、いわゆる誤信念 (false belief) の理解 (人は現実そのものとは異なる、誤った信念を抱く可能性があることの理解) が進み、心を現実のコピーとしてではなく解釈装置として理解する

ようになるという。たとえば、大好きなコーラの缶の中身が牛乳にすりかえられていることを知らない者は、コーラの缶を見て喜ぶが、実際に缶の中身が牛乳だと知ったらがっかりするであろうことを、4歳から6歳頃にかけての間に理解できるようになるのは、誤信念を理解できるようになったためであると「心の理論」研究では考える (Harris et al., 1989)。

こうした種々の“心理化 (mentalising)”能力の発達に関わる社会的認知研究のなかで、「やさしい」「いじわるな」といった人格特性 (personality trait: 以下、特性と略す) を幼児がどのように理解しているかという問題は、最近になってようやく検討されるようになった領域である。本論では、なぜ幼児期の特性理解に関する研究が相対的に立ち遅れてきたのか、その背景を探るとともに、幼児期からの特性理解の発達を検討するうえで注目すべき論点を明かにしていきたい。

2. 特性理解の発達に関する従来の研究

社会的認知の発達の研究において特性の理解は、従来、幼児にとっては難しい高度な心的側面とみなされてきた。その理由としては、第一に、自己や身近な他者について「どんな人か」といった観点から自由に語ったり記述したりする方法を用いるという、自由記述法による初期の研究で、自他の特性への言及は児童期以降になって急激に増加するという結果が得られたことが挙げられる。70年代に行われた早期の研究は、たとえば「私は誰 (Who am I?)」という質問に対して「私は」に続く文章を自由に20ほど作成してもらう (Montemayor & Eisen, 1977)、自分自身や自分の好きな人・嫌いな人が「どんな人か?」という質問に対して自由に回答してもらう (Livesley & Bromley, 1973)、あるいは「自己 (self) とは何か?」「心 (mind) とは何か?」「心と体 (body) の違

いは何か?」といった質問に回答してもらうなど (Broughton, 1978)、自己を中心としてその定義を求めるといった形式のものが多く、こうした研究では特性といった内面的・心理的な側面への言及が7～8歳以降の児童期に急増することから、幼児の自己理解は身体的外見や持ち物といった目に見える外的・物理的側面によって規定されていると考えられてきた (Montemayor & Eisen, 1977; Livesley & Bromley, 1973; Guardo & Bhojan, 1971; Mhor, 1978; Broughton, 1978)。

第二の理由として、子どもの特性理解は行動予測法と呼ばれる実験的な検討によって、大人と同じように特性 (の構造面) を理解しているか否か、何歳頃から大人と同じような特性概念を持つようになるかといった観点から研究が進められてきたという背景がある。行動予測法とは、主人公が将来どのような行動を行うか予測をさせることによって、先行して与えた行動情報から推測される特性と一致した行動予測ができるか否かを検討する課題であり、主として「場面を超えた一貫性」と、「時間を超えた安定性」という特性の構造に関する理解に焦点が当てられてきた。代表的な Heller & Berndt (1981) の研究では、2つの場面で利己的または寛大に振る舞うかを予測させた結果、6歳の幼児でも寛大な人は利己的な人よりも寛大に振る舞うという行動予測が可能であるが、寛大な人と (統制条件として示された) 特定の特性を持たない人物とを分化して捉えるようになるのは児童期以降であることを見いだした。この研究以降、行動予測法による研究が盛んに行われ、児童期に達すると、年齢とともに行動予測能力はより安定的・弁別的になることが示唆されている。しかし、幼児に関しては、特性と一致した行動が予測できないとする研究もある (Rotenberg, 1982 ほか)。結論に違いが生じる理由として、松永 (1995) は、特性の種類や動機づけ、実験手続きなどの要因によって、幼児の行動予測能力が左右される可能性を指摘している。

3. 特性理解の発達に関する近年の動向

こうした従来の研究に対して、幼児も特性といった内的側面を含めて自己についてとらえうとする近年の主張がある。80年代以降になると、「どんな人?」といった自己定義を求める抽象的な質問だけでなく、より具体的な複数の質問を行うことによって、幼児期を含めて自己理解の発達が方法論的にも再検討されている。たとえば Damon & Hart (1988) は、抽象的な1つの質問では子どもの自己理解を十分にとらえきれないと考え、日常的に近い会話のなかで、自己の定義のみならず評価 (好きなところ) や関心 (どんな人になりたいか) といった複数の具体的な質問を行い、さらにその理由や根拠をたずね

る (なぜそれが重要な?) という方法によって、4～14歳の子どもたちがどんな側面を語りえたのかということを経験的に検討した。その結果、自己理解の発達の变化は、身体・行動・社会・心理という4つのカテゴリーのうち、どの側面に言及するかではなく、各々カテゴリーに関する理由づけのレベルにあらわれるとの見解を示している。発達レベルは青年期にかけて4段階に分けられ、幼児期を含む第一段階 (児童期初期) は、子どもの自己理解は単にあるカテゴリーに属するか否か、つまり全か無かの意味合いしか持たないカテゴリー的査定段階とされ (例: 「背が高い」という身体的特徴について、 「だって背が高いから」と答える)、第二段階 (児童期中期・後期) になると他者との比較による自己査定 (例: 「○○ちゃん (他者) よりも背が高いから」と答える) が可能になるという。

Damon らのゆるやかな研究手法は臨床的なインタビューと呼ばれ、子どもの自己理解の発達をとらえる新たな枠組みを示した点で注目に値する。しかし、その分類カテゴリーやレベルの設定には曖昧な点があるという指摘がある。佐久間・遠藤・無藤 (2000) はそうした問題意識から、Damon & Hart (1988) の分類カテゴリーを改変し、幼児期 (幼稚園年長児) から児童期 (小学校2年生・4年生) にかけての自己理解の発達を検討している。具体的には、Damon & Hart (1988) の分類枠のうち、社会カテゴリーを除く3つの上位カテゴリーについて①身体・外的、②行動、③特性と設定し、それぞれの内容を Big Five¹ などの視点からさらに下位分類して検討するとともに、自己評価 (良いところ・悪いところはあるか、好きなところ・嫌いなところはあるか) という観点からも検討した。その結果、いずれの年齢でも行動的側面への言及が最も多いものの、幼児 (年長児) は小学生と比べると具体的な身体・外的側面への言及が多いこと、これに対して小学生は年長児と比べると行動や特性といった側面への言及が多く、その内容は外向的 (例: よくしゃべる、明るい) ・勤勉的 (例: 最後までやらない、まじめ) になることが明らかになった。また、評価的側面については、幼児は自己の肯定的側面のみに言及する者が多いが、小学生では否定的側面に言及する子どもが増えることが示されている。

行動予測法においても、6歳以下の幼児を対象とした松永 (1995) の研究で、紙芝居を用いてある特性を有する登場人物の行動を繰り返し提示するという設定で実験を行った結果、3歳児でもとりわけ否定的な特性に関しては的確に把握しており、年中児 (4～5歳) から年長児 (5～6歳) にかけての時期に肯定的な特性も含めてより識別的にとらえうるようになることが見いだされている。さらに、5～6歳の年長児になると、ある特性を

持つ主人公の将来の行動をある程度安定的にとらえるようになるだけでなく、主人公の行為やその結果の良し悪しにかかわらず、主人公の動機の良し悪しに基づいて将来の行動・感情・特性を推論できるようになることが示されている。たとえば Heyman & Gelman (1999) の研究では、意地悪な子どもが相手の子にホースで水をかけるとい話を聞いた場合、その主人公はポジティブ・ネガティブいずれの動機を持って行ったのか、自分の行為の結果相手に生じる反応を予測できたか、行為の結果を見てどう思ったかということ子ども達にたずねた。その結果、4・5歳の幼児にも、与えられた特性と一致した方向で主人公の動機・期待・情動の予測をすることができるという結果が得られている。

これらの研究から、特性への関心は幼児期初期に芽生え、5歳前後には単なる表出行動以上の概念として、特性を理解するようになると考えられる。つまり、個人に特有な心理的背景のもとに、ある程度一貫した行動を生み出す「内的・因果的な」構造を持つものとしても、特性を理解しはじめるのである。

4. 先行研究における課題

しかし、これまでの特性理解の研究では、幼児期の子ども自身が自他の特性をどのように評価し、意味づけているかということは、必ずしも詳細に検討されていない。たとえば、子どもの自由記述をもとにした研究では、インタビューを通して得られた自己理解に関わる子どもの語りを、それがどういった属性に相当するかという観点から最小の意味ユニットに分割し、回答内容をカテゴリーに分類してきた（例：名詞→身体・外的カテゴリー、動詞→行動カテゴリー、形容詞→特性カテゴリー）。しかし、たとえばある子どもが「Aちゃん、ひとりでチョコレート作ったの」と語ったとき、我々は「この子は自分の行動的側面について述べている」ととらえるだろうか。むしろ、「この子は“自分ひとりでやり遂げた”という有能感や、興奮に満ちた喜びを表現している」と受け止めるのではなかろうか。子どもが実際に現実生活のなかで自他の意味をとらえるのは、まさに後者のようなやりとりにおいてであろう。したがって、意味ユニットが属性ごとにどんな内容かということだけでなく、むしろ前後の文脈をも含めて、子どもなりにどのような情動的な評価を伴ったものとして語っているのかという観点から、改めて検討する必要があると考える。また、幼児が特性を含む自他の心的側面についてとらえる必要性は、他者と日常の生活をともにする他者との関係のなかで生じると考えるならば、実在の他者との関係のなかで自他の特性をどう理解しているかを検討する必要があると思われるが、これまでの研究では幼児が「誰のことを、ど

のような意味で“やさしい”と言っているのか」ということは十分に検討されているとはいえない。

これらの問題が取り上げられてこなかった理由としては、幼児の特性理解を児童期以降の子どもや大人の特性理解との比較のなかで位置づけるといった研究の枠組み自体の問題があると思われる。その一方で、幼児期の対人理解の特徴に目を向けると、乳児期に自他についての意識や内面についての理解が芽生え、それが言語や認知、人間関係の広がりとともに急速に変化・発達を遂げていく、子ども時代への重要な移行期にあたると位置づけることができる。そこで、本論ではこうした特徴を踏まえて、幼児が特性をどんな意味内容で語っているのか、そこにあらわれる対人評価の次元は何かという問題に迫っていききたい。具体的には、これまであまり注目されてこなかった乳児期の対人理解との連続性という観点から、他者理解や他者との関係性とのかかわりを重視して検討していく。

5. 乳児期の対人理解—自他の内面理解に関する近年の研究

乳児期の対人理解は、身近な他者と繰り返し交わされる感情的やりとりのなかで芽生え、発達していく。この点に、異論を唱える者は無いただろう。人は誕生時より、泣く・微笑するといった感情表出を行う。新生児期の微笑はレム睡眠中に見られることから「生理的微笑」とも呼ばれ、この時期の感情表出に「うれしい」「かなしい」といった主観的な感情状態との明確な対応があるか否かは定かではない。しかし、養育者が乳児の感情表出を見て、乳児にも感情があるとみなし、そうした理解のもとに乳児とかかわることによって、乳児の感情を介したコミュニケーションは徐々に発達していく（久保, 1998；遠藤, 1998）。その証左として、生後10週の乳児に対して、母親が喜んだ表情や声でやりとりをすると乳児も喜んで見えるような表情や発声をし、逆に悲しそうな表情や声で母親がやりとりをすると乳児も指しゃぶりをするなど落ち着きの無い感情状態になるなど（Haviland & Lelwica, 1987）、乳児が母親の感情を識別し、それに対応した感情をあらわすことを示す研究がいくつかある。こうした乳児の反応を情動伝染²の観点から説明しようとする立場も見られるが、乳児が他者の情動表出をある程度は識別しうることは確かであろう。生後半年を過ぎる頃には喜怒哀楽といった基本的な情動がほぼ揃い（Levis, 1993）、感情表出をコミュニケーションの道具として用いるようになる。例えば、誰かが乳児の腕を押さえて動けないようにすると乳児は怒りの表情を示すが、生後4ヶ月では腕を抑えている人に視線を向けるのに対して、生後7ヶ月になると自分の母親のほうに視線を送

ることから、生後7ヶ月頃になると乳児は怒りの表情によって母親に助けを求めようとするようになるのではないかと考えられている(Stenberg & Campos, 1990)。そして1歳を過ぎると、他者の感情に巻き込まれずに、ある程度は自分の感情を保つことができるようになってくる。たとえば、友達が目の前で転んで大声で泣き出しても、泣き出したり緊張して不快感を示したりせずに、相手にそっと触れたり、おもちゃを持ってくるなど、相手をなぐさめたり勇気づけたりしようとすらすらするようになる(Zahn-Waxler & Radke-Yarrow, 1982)。このように、乳児は誕生時より感情を持つことによって、言葉が芽生える以前から他者とのコミュニケーションに開かれる。その結果として、他者によって感情を分かち持たれることで、徐々に他者の感情を意識するようになってともに、自己の感情をも意識的に行使するようになるのである。

乳児期の自己意識の発達についても、同じような見かたがある。遠藤(1997)は、Gibson(1979)やNeisser(1988, 1991, 1993)の理論を引用して以下のように述べている。人は誕生時から、物理的・社会的環境において直接的に知覚される“発動主体としての自己(self as agent)”の覚知(awareness)は備わっているが、“客体としての自己(self as object)”は、身近な他者との具体的な相互作用を通して、自分自身についての知識を他者によって与えられ、またその他者と共同構成することによって後から発達する。この後者の、いわゆる自己意識は、初めは「他者と分かち持たれるものとして出発し、徐々に私的性質を帯びてくる(p.62)」と遠藤(1997)は言う。つまり、さらなる相互作用と認知発達の歴史の中で、他者とはしだいに“そこにいて”自分を映し出し、自分に関する知識という風を送り込むだけの存在でなくなり、固有の“発動主体性(self-agency)”や“私”を備えた存在、自分とは異なる視点を持つ存在として他者をとらえるようになる。この段階に至って少しずつ“窓”は閉められ始め、他者の目を内なるまなざしとして自己を見始めるときに、自覚的な自己意識が芽生えるのではないかと述べている。こうした“再帰的な意識(recursive consciousness)”がいつごろ成立するかに関しては論者によって意見が異なるが、共同注意や社会的参照、模倣学習などの出現によって特徴づけられる、第二次間主観性³(Trevanthen & Hubley, 1978)が成立する9ヶ月前後との見かたがあるという。Tomasello(1993)はこの時期の変化を“生後9ヶ月の奇跡”と呼び、これ以降は他者“から”学ぶだけでなく、他者“を通して”学ぶことができるようになるという。こうしたことから、「自己理解とは他者の何らかの介在、あるいは子どもによる他者理解なくしては、いかなる意味でも生じ得ない(p.63)」と遠藤(1997)は主張している。

さらに最近ではReddy(2005, 2008)が、自己意識とは初めのうちは観念(idea)ではなく情動(emotion)であり、自己意識は他者意識から生じるという見地を提示している。彼女は発達の早期から親子の相互作用を観察し、shyness(他者から見つめられることを避けつつも微笑む)やshowing-off(他者の注目を得るために、自己の諸側面を際立たせる)といった自己意識的情動(self-conscious emotions)の兆候が、すでに生後1年目から認められると指摘した。そして、これらの自己意識的情動は、乳児が他者から注目される場面で現れ、注目の対象となっている自己に関する見え(visibility)を調整しようとする行為であることから、自己意識というよりもむしろ他者意識(other-consciousness)から生じる関係情動(relational emotion)であると主張している。他者との活発で直接的な情動的関与において、自己の経験の知覚と他者の経験の知覚との間のラインは非常に透過性の高いものであるとする、ラディカルな見地である。

6. 幼児期における特性理解の特徴と今後の課題

このような近年の乳児研究から、乳児が身近な他者と日々行うface to faceのやりとりのなかで、乳児が自他の内面に目を向け意識する文脈は極めて感情ベースであり、また客体的な自己意識の成立にとって、乳児に目を向ける他者の存在や、他者という主体についての覚知が不可欠である可能性があると考えることができる。こうした対人認知の特徴は、基本的な意味では幼児期にも受け継がれているのではなかろうか。では、幼児期においては何が発達していくのだろうか。おそらく幼児期になると、言語というモードが、他者とのやりとりにおいてより積極的に活用されるようになる。したがって、「今、ここ」での感情に基づく自他の覚知を超えて、自他の内面を含む概念が表象レベルでも構築され始めるのではないかとと思われる。

幼児の自他理解に関して松井・無藤(1996)は、幼児期後期4～6歳の子ども73名に対して、自己と身近な他者(養育者・よく一緒に遊ぶ友だち)についてどんな人(子)か、好きなところや嫌いなところ、似ているところや違うところはあるかといった質問を個別に行い、自己と他者とで回答内容に違いが見られるかどうかを検討した。そして、子どもたちの回答を①身体(身体などの外見)②社会(名前、マーク、年齢など)③行為・行動(具体的、習慣的行動)④能力・好み⑤心理(特性、感情)の5カテゴリーに分類したところ、自己よりも他者についてのほうが言及されたカテゴリー数が多く、多面的に語りうることが明らかになった。また、①身体②社会のほかに⑤心理カテゴリーについては自己よりも他者についてのほうが、④能力・好みカテゴリーについ

ては他者よりも自己についてのほうが、言及される頻度が高いことが示された。他者のほうが自己よりも多面的に語りうることに加え、自己と他者とは語られる側面が異なり、特性といった高度に内面的とされてきた心的側面が他者に関してよく言及されるという結果は、児童期以降を対象とした先行研究と異なる様相を呈している (Bromley, 1977; Damon & Hart, 1988)。しかし、自他の内面を含む覚知において、他者とのかわりや他者についての理解を重視する乳児研究の流れに沿ってみていくなれば、これは妥当な結果であると考えられる。ただし、特性については自己よりも他者のほうが、能力や好みについては他者よりも自己のほうがよく言及されるというように、同じ内面でも種類によって言及される傾向に違いが見られる可能性もあることから、それぞれの内面についての幼児の言及が意味するところに関しては、さらに検討する必要があると思われる。

この点に関連して、幼児期に言及される傾向が高いとされる「やさしい」という社会的特性 (松井, 1999; 佐久間・無藤・遠藤, 2000) について、幼児の理解に絞って検討した野田 (松井)・無藤 (2001) の研究では、36名の幼児に対して年中 (4～5歳代)・年長 (5～6歳代) の時点で「やさしい子とは、どんな子か」「やさしい子とは、どんなことをするか」など個別にインタビューを行った。その結果、年長になると「転んじゃったら、なでなでする」など行動面に言及するようになる子どもが増えると同時に、その内容も「いじめない」など単にネガティブなことをしないとといった観点から、「けんかして泣いてる時とか助けてあげる」など、他者に対して積極的に向社会的行動をするといった観点に変化していくことが見いだされた。年長になると多く見られるようになる「～してあげる、～してくれる」という表現には、他者との情緒的な関係性への関心が反映されており、こうしたことから幼児期後半には対人評価の次元が他者との情緒的なつながりを重視する方向へと変化してくのではないかと考察されている。

さらに野田 (松井)・無藤 (2005) は、幼児期の子どもの語り (narrative) を検討した先行研究 (Ely, Melzi, Hodge & McCabe, 1998; Feeny, Eder & Rescorla, 1996; Emde, Wolf, Oppenheim, 2003) において子どもの適応上重視されている社会・情動的意味づけの内容に注目し、先の松井・無藤 (1996) で収集したデータを語りの観点から以下の6カテゴリーに再分類し、検討を行っている。具体的には、① Social Relation (社会的関係：他者との愛情深い向社会的・共感的態度を取ったり取られたりするかどうか) に言及するもの。例として、やさしい・いじわる・おもちゃを買ってくれる・洋服貸してくれないなど ② Competence/Mastery (能力：自他の能力や、そ

れに関する評価に言及するもの。例として、けんかが強い・弱い・ご飯食べるの遅い・ピアノ弾くの天才など) ③ Interest/Liking (好み：よくする活動や好みのものなど、自他の好みや興味に言及するもの。例として、カボチャが好き、お外が嫌い、いつもブロックで遊んでるなど) ④ Moral (道徳：道徳や慣習に照らして望ましいか否か、大人から評価されるか否か。例えば、おりこう・悪い子・お手伝いする・散らかす・嘘をつくなど) ⑤ Emotion Expression (情動：自他の感情やその表出に言及するもの。例として、喜ぶ・怒る・泣く・笑う・怖い・寂しいなど) ⑥その他となっている。そして子ども達の回答内容を①～⑤のカテゴリーの観点から検討したところ、(1) 社会的関係は自他いずれの語りにおいてもよく見られるが、特に他者について語る際に言及されやすい (2) 能力や③みなどの、いわば行為主体の有能感やその評価に関わる側面は、養育者よりも自己や友達についての語りでなされやすい (3) 情動的な意味づけは、自己や友達よりも養育者についての語りでなされやすいといった特徴が見いだされた。

幼児を対象として行ったこれらのインタビューから、幼児は自己よりも他者について語るほうが容易であり、自己と他者、他者でも養育者と友達とでは注目する側面が異なる可能性が示唆された。どのように異なるのかを結論づけることはまだ難しいが、ひとくちに内面といっても、能力や好みといった行為主体の有能感やその評価にかかわる側面は自己や友達、社会的関係については養育者や友達、情動面については養育者というように、注目されやすい側面が異なるようである。幼児において最も言及頻度の高い「やさしい」という特性を含む社会的関係や感情への言及が養育者で多く見られることを考えると、愛着 (アタッチメント) に代表されるような特定他者との情緒的な絆が表象レベルでも機能しはじめ、それが他者の内面理解のなかにあらわれているとも解釈できるかもしれない。

ただし、こうした自他に関する概念は、他者との「語り」においてその都度構成されるという側面を持つ。ゆえに、非常にダイナミックなものであり、また他者からの評価を含むかわりによって多分に影響を受けるものであることを忘れてはならない。Brownell & Kopp (2007) は、他者の心的理解に関しては有能であるようにみえる前言語期の子どもの言動をとらえる際に注意すべき点として、ある特定の年齢で限定された条件の下で生じるひとつの行動観察によって発達をとらえようとするものの問題性を指摘している。すなわち、子どもは「いつ」どんなコンピテンス (能力) を「持つ」という問いよりも、むしろ子どものコンピテンスは加齢に応じて、状況や課題の特徴、測度に応じてどう変化するのか、またそ

れはなぜか、という問いを立てるべきだと言う。これはもっともな指摘であり、幼児期の心の理解に関しても同様に、今後は種類の異なるデータの蓄積や検討がさらになされ、それらを体系的に説明する理論的枠組みを構築することが求められているといえよう。

【注釈】

- 1 Big Five とは、外向性 (Extraversion)、協調性 (Agreeableness)、良心性 (Conscientiousness)、情緒安定性 (Neuroticism)、開放性／知的好奇心 (Openness /Intelligence) という主要5因子で性格を記述できるとする、Goldberg (1990) にはじまる近年の大人を対象とした性格心理学における仮説モデルである。
- 2 情動伝染とは、新生児期に他の乳児の泣き声につられて泣き出してしまいう現象であり、共感性の原型とする見かたもある。
- 3 Trevarthen は、乳児が「主観性 (subjectivity)」を持つ存在であるだけでなく、人に合わせて自分の行動を調節することができることから、親子が互いに行動を調節し合うことによって成り立つ原初的なコミュニケーションにおいて共有される世界を「第一次間主観性 (primary intersubjectivity)」と呼んだ。この段階ではまだ認識内容は共有されていないものの、コミュニケーションとしての相互の調整はなされ、情緒を伝達しあうことができる。続く第二次間主観性の時期には、乳児は物や動作を介して他者とやりとりができるようになり、時間的にも空間的にも認識内容として共有できる世界が広がっていくと考えられる。

【引用文献】

- Barden, R., Zelko, F., Duncan, S., & Masters, J. (1980) Children's consensual knowledge about the experiential determinants of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 968-76.
- Bromley, D.B. (1977) *Natural Language and the Development of the Self*. Nebraska Symposium on Motivation, University of Nebraska Press, 117-167.
- Broughton, J.M. (1987) Development of concepts of self, mind, reality, and Knowledge. In Damon, W. (Ed), *Social Cognition*, San Francisco: Jossey-Bass.
- Brownell, C.A., & Kopp, C.B. (2007) Transitions in Toddler Socioemotional Development: Behavior, Understanding, Relationships. In Brownell, C.A. & Kopp, C.B. (Eds.) *Socioemotional Development in the Toddler Years*. Guilford. 66-99.
- Bretherton, I., & Beeghly, M. (1982) Talking about internal states: The acquisition of an explicit theory of mind. *Developmental Psychology*, 18, 906-921.
- Damon, D., & Hart, D. (1988) *Self-Understanding in Childhood and Adolescence*. Cambridge University Press, Cambridge.
- Denham (1986) Social cognition, social behavior, and emotion in preschoolers. *Contextual validation*. *Child Development*, 57, 194-201.
- Ely, R., Melzi, G., Hodge, L., & McCabe, A. (1998) Being Brave, Being Nice: Themes of Agency and Communion in Children's Narratives. *Journal of Personality*, 66:2, 257-284.
- Emde, R.N., Wolf, D.P., & Oppenheim, D. (2003) *Revealing the inner worlds of young children*. Oxford University Press.
- 遠藤利彦 (1998) 乳幼児期における親子の心のつながり. 丸野俊一・子安増生 (編) 子どもが「ころ」に気づくとき ミネルヴァ書房 1-31.
- 遠藤利彦 (1997) 乳幼児期における自己と他者, そして心一貫性, 自他の理解, および心の理論の関連性を探る一. *心理学評論*, 第40号, No. 1, 57-77.
- Feeny, N., Eder, R.A., & Rescorla, L. (1996) Conversations with Preschoolers: The Feeling State Content of Children's Narratives. *Early Education and Development*, Vol.7, No.1, 79-97.
- Gibson, J.J. (1979) *The ecological approach to visual perception*. Boston: Houghton Mifflin.
- Goldberg, L. (1990) An alternative "Description of Personality": The big-five factor structure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 1216-1229.
- Guardo, C., & Bohan, J. (1971) Development of a sense of self-identity in children. *Child Development*, 42, 1909-1921.
- Harris, P.L., Jhonson, C.N., Hutton, D., Andrews, G., & Cooke, T. (1989) Young children's theory of mind and emotion. *Cognition and Emotion*, 3, 379-400.
- Haviland, J.M., & Lelwica, M. (1987) The induced affect response: 10-week-old infants' responses to three emotion expressions. *Developmental Psychology*, 23, 97-104.
- Heller, K.A. & Berndt, T.J. (1981) Developmental changes in the formation and organization of personality attributions. *Child Development*, 52, 623-691.
- Heyman, G.D., & Gelman, S.A. (1999) The use of trait labels in making psychological inferences. *Child development*, 70, 604-619.
- 久保ゆかり (1998) 気持ちを讀みとる心の成長. 丸野俊一・子安増生 (編) 子どもが「ころ」に気づくとき ミネルヴァ書房 83-110.
- Levis, M. (1993) The emergence of human emotions. In M.

- Lewis & J. M. Haviland(Eds.) Handbook of emotions. Guilford Press, 223-235.
- Livesley, W.J., & Bromley, D.B. (1973) Person perception in childhood and adolescence. London: Wiley.
- 松井淳子・無藤隆 (1996) 幼児における自己と他者の理解—言語記述の枠組みの違い—. 日本心理学会第60回大会発表論文集, 247.
- 松井淳子 (1999) 集団活動場面における幼児の他者理解—友だちについての語りの観察から—. 乳幼児教育学研究、第8号, 53～61.
- 松永あけみ (1995) 幼児における他者の内的特性の把握と行動予測能力. 教育心理学研究, 43, 204—212.
- Mhor, D. (1978) Development of attributes of personal identity. Developmental Psychology 4, 427—428.
- Montemayor, R., & Eisen, M. (1977) The development of self-conception from childhood to adolescence. Developmental Psychology, 13, 314-319.
- 野田 (松井) 淳子・無藤隆 (2001) 幼児における人格特性の理解 (2) —社会的特性の理解についての縦断的検討—. 日本発達心理学会第12回大会発表論文集, 135.
- 野田 (松井) 淳子・無藤隆 (2005) 幼児における自己と他者の認識 (3) —社会・情動的側面についての検討—. 日本発達心理学会第16回大会発表論文集, 454.
- Neisser, U. (1988) Five kinds of self-knowledge. Philosophical Psychology, 1, 35-59.
- Neisser, U. (1991) Two perceptually given aspects of the self and their development. Developmental Review, 11, 197-209.
- Neisser, U. (1993) The self perceived. In U. Neisser (Ed.) The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge. Cambridge: Cambridge University Press. 3-21.
- Reddy, V. (2005) Felling shy and showing-off: Self-conscious emotions must regulate self-awareness. In Nadel, J. & Muir, D.(Eds.) Emotional development. Oxford University Press.
- Reddy, V. (2008) How infants know minds. Harvard University Press.
- Rotenberg, K.J. (1982) Development of character constancy of self and other. Child Development, 53, 505-515.
- 佐久間 (保崎) 路子・遠藤利彦・無藤隆 (2000) 幼児期・児童期における自己理解の発達：内容的側面と評価的側面に着目して. 発達心理学研究, 第11巻, 第3号, 176—187.
- Stenberg, C.R., & Campos, J.J. (1990) The development of anger expressions in infancy. In N. Stein, B. Leventhal & T. Trabasso(Eds.), Psychological and biological approaches to emotion. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associations. 247-282.
- Tomasello, M. (1993) The interpersonal origins of self concept. In U. Neisser (Eds.), The perceived self: Ecological and interpersonal sources of self-knowledge. Cambridge: Cambridge University Press. 174-184.
- Trevarthen, C., & Hubley, P. (1978) Secondary Intersubjectivity: Confidence, confiding, and acts of meaning in the first year. In A Lock (Ed.), Action, gerture, and symbol: the emergence of language. New York: Academic Press. 183-229.
- Wellman, H.M., & Bartsch, K. (1994) Before belief: Children's early psychological thepy. In C. Lewis & P. Mitchell (Eds.), Children's early understanding of mind: Origins and Development. Hove: Laurence Erlbaum Associations. 331-354.
- Welman, H., Harris, P., Banerjee, M., & Sinclair, A. (1995) Early understanding of emotion: evidence from natural language. Congition and Emotion. 9(2/3), 117-149.
- Zahn-Waxler, C., & Radke-Yarrow, M. (1982) The development of altruism: Alternative research strategies. In N. Eisenberg(Ed.), The development of prosocial behavior. Academic University Press. 109-137.